

第 22 回国際昆虫学 会議報告

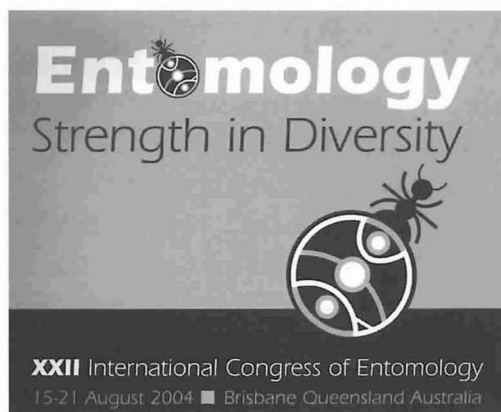
吉田 忠晴

2004年8月15日～21日の7日間、第22回国際昆虫学会議 (XXII International Congress of Entomology) が、オーストラリア、クイーンズランド州の州都ブリスベンで開催された。オーストラリアは、1998年にアデレードでの国際社会性昆虫学会以来、2回目の訪問であった。南半球のオーストラリアの季節は、日本と正反対の冬とはいえ、ブリスベン日本の初春を思わせる気候で、連日30℃以上の猛暑が続いた東京を思うと、毎日快適に過ごすことができた。街の中心を蛇行するようにブリスベン川が流れ、川をはさんだ両岸には、近代的建物と19世紀のおもかげを残す歴史的建物が立ち並ぶ、美しい街あった。会場となったコンベンションセンターは、ブリスベン川に架かるヴィクトリア橋を渡ったサウス・バンク地区にある大変大きな建物であった。

参加者数は78か国から計約2600名と、4年ごとに行われる本会議は、昆虫学全般にわたる幅広い内容の発表が毎回行われる。日本からの参加者は274名で、地元オーストラリアの685名、アメリカの611名に次いで3番目で、顔なじみの方々と会うことができた。因みにそ



参加登録デスク



大会のシンボルマーク、ミツバチアリ

の他に参加数の多かった国は、イギリス128、ニュージーランド112、カナダ73、ドイツ59、韓国47、オランダ37、南アフリカ36、ブラジル34、スウェーデン22、フランス20などであった。

大会は7つのプレナリー講演、19のセッションからなるシンポジウムと一般講演、大きなエキシビションホールでのポスター発表からなり、これにサテライトミーティングと、新しい試みとしてコンピュータを用いた電子ポスターが加わった。一般講演数は1814題、ポスター発表は16日～18日、19日～21日と各3日間に分けられ、計1045題の発表があった。日本からの講演発表は、口頭発表が80、ポスターが150の計230題であった。

開会式は、15日の午後5時から開催された。前日の14日の夜行便で日本を出発し、ブリスベンに早朝到着したため、夕方からの開会式は眠気等でややつらいものがあった。開会セレモニーの中で、昆虫学上国際的に著しい貢献をした研究者に贈られる功労賞に、正木進三先生が選ばれ、開会式の満員の参加者の前で表彰されたことは、嬉しいできごとであった。セレモニーに引き続き、オーストラリア国立大学のSrinivasan教授による「小さな脳でミツバチはどこまで認識しているのか」と題するプレナリー講演が行われた。ミツバチの脳や学習能力、情報処理に関する講演で、眠気も飛んでしまった。Srinivasan教授は、2001年11月にミツバチ科学研究施設に来訪し、ミツバチの定位、記

億メカニズムに関するセミナーが行われたこともあり、興味深い内容であった。その夜の歓迎レセプションでは、Srinivasan 教授や多くの研究者との再会を楽しむことができた。

セクション 19 の社会性昆虫に関するシンポジウムは 3 日間行われた。19 日の「社会性昆虫の組織化と生殖のモデル化における最近の進歩」では、オーストラリアの Oldroyd 教授のグループは、コロニーを構成している働き蜂の遺伝的な多様性が、ミツバチの巣内温度調節に貢献していることを発表した。20 日には「社会性昆虫におけるゲノム研究；急速に進歩した分野における最近の知見」と「社会性昆虫の病気と害敵」、21 日に「社会性進化の比較系統学的アプローチ」の講演が行われた。21 日のシンポジウムでは、小野助教授が「スズメバチの社会化学物質」と題して講演した。オオスズメバチが攻撃のシグナルとする警報フェロモンの成分や、「ナショナルジオグラフィック」の制作で、米国で放映されたオオスズメバチのシーンを取り込んだ内容は、聴衆に大きな興味を持たせることとなった。

玉川大学からは、佐々木教授が「キンウワバの緯度の相違によるサーカディアン行動リズムの生態的適応」(佐々木, 山村), 新島教授が「生物的防除資材としてのリュウキュウツヤテントウの増殖法」(新島, 谷口), 筆者が「セイヨウミツバチ女王蜂とニホンミツバチ雄蜂の異種間交尾」(吉田, 中村, 高橋, 干場)をそれぞれ発表した。また、佐々木教授は国際昆虫学会常任評議員として種々の委員会に出席し、会期中は多忙な毎日であった。



ポスター会場とコーヒーブレイク



小野助教授の講演

大会は盛大で、オーストラリアらしいというか、大会会長 Zalucki 博士の哲学からか、開会式や閉会式、さよならパーティーなどはフランクな雰囲気と徹し、形式的なことは徹底的に廃されていた。会場となったコンベンションセンターは、広々としていて、パワーポイント発表用の設備もよく整っていたが、ポスター発表ではボードの配置が悪く、配慮がすこし欠けていた。昼食はサンドイッチが全員に配られたり、中央に大きな生きたナナフシがいるホールで、休憩時にはコーヒーや紅茶のサービスがあり、ゆったりと休憩できた。ただ、大会が始まる前のホームページでのタイムリーな情報の発信と、諸種の問い合わせに対する現地準備委員会からのレスポンスがきわめて悪かった点は、参加する側にとって不安となる一面であった。

会議終了後には、ブリスベン郊外のローン・パイン・コアラ保護区を訪れた。自然に近い環境の中で、たくさんのコアラがのんびり暮らしている様子や、カンガルーやワラビーといったオーストラリアを代表する動物にも触れることができた。4年後の次回 2008 年大会の開催地は、南アフリカの Durban に決定した。

(〒 194-8610 町田市玉川学園 6-1-1

玉川大学ミツバチ科学研究施設)